歴 代 誌

― 主の契約はとこしえに ―

心に留めよ。主の契約をとこしえに。
命じられたみことばを、千代までも。
それは、アブラハムと結んだ契約。
イサクへの誓い。

I 歴 16:15-16

聖書を読む会

表紙イメージ：

『イスラエルの王ダヴィデとその息子ソロモン』作者不詳　12 世紀
ストラスブール大聖堂（ノートルダム・ドゥ・ストラスブール大聖堂）のステンドグラス
（フランス、ストラスブール）

目 次

さあ始めましょう ―手引の使い方― …… iv
歴代誌を読む前に …… 1

● 歴代誌 第一 …… 3

1課　系図 1-9章 …… 4
2課　サウル王の背信 10章 …… 6
3課　ダビデ、王となる 11章 …… 9
4課　全イスラエルが一つとなって 12章 …… 12
5課　神の箱とウザ 13章 …… 15
6課　ペリシテ人に勝利する 14章 …… 17
7課　神の箱をエルサレムへ 15章 …… 20
8課　神の箱の前での礼拝と賛美 16章 …… 22
9課　ダビデ王家をとこしえに立てる 17章 …… 27
10課　周辺諸国との戦い 18-20章 …… 29
11課　人口調査とオルナンの打ち場 21章 …… 31
12課　神殿建設の準備 22章 …… 33
13課　神殿建設の経緯 23-27章 …… 35
14課　ダビデの勧め 28章 …… 38
15課　ダビデの賛美とソロモンの即位 29章 …… 40

● 歴代誌 第二 …… 43

16課　神殿建設の準備をするソロモン 1-2章 …… 44
17課　ソロモンによる神殿建設 3:1-5:1 …… 48
18課　神殿の奉献 5-7章 …… 51
19課　ソロモンの栄華 8-9章 …… 58
20課　レハブアムと王国の分裂 10-12章 …… 64
21課　アビヤ 13章 …… 70
22課　アサ 14-16章 …… 72
23課　ヨシャファテ 17-20章 …… 78
24課　ヨラム、アハズヤ、アタルヤ 21-23章 …… 87
25課　ヨアシュ、アマツヤ、ウジヤ 24-26章 …… 92
26課　ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ 27-32章 …… 98
27課　マナセ、アモン、ヨシヤ 33-35章 …… 111
28課　ユダ王国の終焉（しゅうえん）とその後 36章 …… 117

あとがき …… 121
イスラエルの王の年表 …… 124
巻末注 …… 125

さあ始めましょう ―手引の使い方―

この小冊子は、「手引」と呼ばれる質問集で、小グループで共に聖書を読むための助けとして作られました。また、個人の学びや日々の祈りのためにも使うことができます。

◆グループで使う場合の指針

司会者：グループの中で司会者を決めましょう。

【役割】

・司会者は教えるのではなく、手引にそって質問し、
・参加者が自由に意見を述べ、話し合えるように励まします。
・どのような意見でもその是非を判断せず、分からないことや意見の相違を無理に解決しないで先に進みましょう。
・グループでの学びが何回かにわたっても、「祈り」までは一人の司会者が担当するとよいでしょう。

【準備】

・司会者は、あらかじめ聖書箇所を読み、
・質問、脚注、コラムや「まとめ」によって、その箇所の意味を理解し、
・「考えよう」で、聖書の言葉にどのように応答するかを、ある程度、思い描いておくことが大切です。

参加者

・実り豊かな学びのために予習をしておきましょう。
・お互いの意見を尊重し、考えたことを率直に分かち合います。
・他の人や別の本から学んだことを話すのではなく、該当する聖書箇所と手引に書かれていることから語り合いましょう。
・脱線したり、一人で長く話したりしないように気をつけます。

参照する聖書箇所に関して

開いて参照するように指示がある場合は、グループでも開いて確認してください。しかし、その他の箇所、たとえば、コラムや脚注、また巻末注などにある聖書箇所は、興味ある人が確認するためのもので、グループの学びでは開く必要はありません。

グループの状況に応じて

一回で進む範囲は、グループの状況や必要に応じて調節してください。「考えよう」の質問と「祈り」は、一つの例ですので、グループの状況に合わせてお使いください。

解釈の違い

解釈の違いがある場合は、教会の指導者の立場を尊重してください。

より詳しく

手引の使い方や、他の手引について詳しく知りたい方は、ウェブサイト（**https://syknet.jimdo.com**）をご覧ください。

凡例

〔　〕　この手引は「聖書 新改訳 2017」（以下「新改訳」）に準拠しています。〔　〕は「聖書 聖書協会共同訳」（以下「共同訳」）の表記で、新改訳と異なり必要と思われる場合に記しています。聖書各巻の略語は、新改訳巻末の一覧に従っています。

例）イザヤ書 45 章 18 節 → イザ 45:18

年　代　王の在位期間や出来事の年代は、学説や辞典により違いがあります。本手引では、主に *Eerdmans Dictionary of the Bible*（Eerdmans Publishing Co., 2000）と『バイブルガイド』（いのちのことば社、2014）に従っています。

在位 前 849-842　「在位は紀元前 849-842 年」という意味です。また、王の在位年で 792/767 とある場合、792 から 767 は前王との共同統治期間という意味です。

年　表　p.126にイスラエルとユダの王の年表があります。これは主に『バイブルガイド』のp.53に従っています。

脚　注　下線のある言葉は、各ページの下（脚注）で解説されている用語です（例：エフライム[a]）。

巻末注　上付数字（例：サウルの油注ぎ[1]）は該当部分に関連する聖書箇所が巻末に記してあります。

コラム　聖書を理解する上で助けとなる説明がされています。

地図 6-E3〔4-F3〕　新改訳聖書巻末地図6のグリッドE3、〔　〕内は聖書協会共同訳巻末地図を指しています。

コラムと豆知識 テーマとページ （カッコ内は豆知識）

ペリシテ人	8
牧者とメシア	11
神の箱	14
名声は全地に	19
神の箱の記事の位置	19
アブラハムへの約束と神の恵み〔慈しみ〕	25
主は王である	26
神殿とメシア	37
神の選び	39
安息1	42
（ソロモンの神殿とモーセの幕屋）	50
契約	53
契約の箱を運ぶ	53
（第七の新月の祭り）	53
（オルナンの打ち場とソロモンによる神殿の奉献）	55
年三回の例祭	62

息も止まるばかり	63
イスラエルの王と全地の回復	63
（平穏）	74
聖書とキリスト者の倫理	75
偽りを言う霊	83
（イゼベルとアタルヤの悪にもかかわらず）	91
全き心〔誠実な心〕	97
（良きサマリア人）	100
忌まわしいもの〔汚れ〕	100
恵み深く、あわれみ深い主	105
心を尽くして	107
自分の子どもたちに火の中を通らせ	113
過越の祭り	116
新バビロニア帝国	119
エレミヤとユダの王たち	120
安息2	120

歴代誌を読む前に

歴代誌の配列と重要性

キリスト教会で使われている旧約聖書の多くは、七十人訳ギリシア語旧約聖書の配列にならい、マラキ書が最後の書物となっています。マラキ書は、捕囚民に悔い改めを迫り、モーセの律法を覚えよと命じ、預言者エリヤの到来と終わりの日の救いの成就を予告して終わっています。しかし、ユダヤ教の正典であるヘブライ語聖書では、歴代誌（中世以前の写本では一巻）が最後に置かれています。歴代誌は、創世紀からバビロン捕囚、そしてユダヤへの帰還までの民族史を振り返り、神の約束を信じて、王の到来を期待しつつ、神殿と民族の再建に取り組む人々を励ましました。

どちらの配列も、律法の重要さを説き、民族の救いを期待して旧約聖書を閉じているのですが、歴代誌では王と神殿に対するユダヤ人の期待が繰り返し描かれています。その信仰と期待は福音書の背景となるユダヤ人の考え方や信仰につながるため、歴代誌は新約聖書を理解する上で大切な書ということができます。

いつ書かれたのか

誰が、いつ歴代誌を書いたのかについては、諸説があります。しかし、歴代誌の最後の2節（Ⅱ歴36:22-23）とエズラ記の最初の3節（エズ1:1-3）を読むと、この書物は、新バビロニア帝国を滅ぼしたペルシアの王キュロスの許しのもとに、多くの民がバビロンから祖国に帰還した後でまとめられたことが分かります。

誰のために書かれたのか

バビロンで 奴隷〔僕〕として長い年月苦しんでいた民は（Ⅱ歴36:17-21）、祖国に帰っても苦難が続いていました。荒廃した土地、ペルシア帝国の属州に住む者として支払うさまざまな税金、そして、周辺に住む異民族からの圧迫がありました。また 異民族との交流によって、神の民としての自意識や信仰さえも揺らぐ者が出てきました。異教徒の支配のもと、

異教徒に囲まれて生きる少数派の神の民は、政治的にも、日常生活の面においても、そして信仰の面においても、存続の危機を抱えていたのです。

何のために書かれたのか

　そのような同胞のために筆をとった編者は、旧約聖書の中ですでに完成していたサムエル記や列王記などの書や、その他の資料を前にして、ユダヤ民族、特にダビデ王以降の歴史を振り返り、神の民としての確信と誇りを持って主に従って生きるように励まそうとしました。

歴代誌の特徴

　そのため、歴代誌には他の書と重複している記事が多くあり、同時に、他の書と比べると、ある出来事が割愛されたり、あるいは、順序が逆になったりしています。また、歴代誌独自の記事もあります。たとえば、列王記はバビロン捕囚の直後の記録で終わっていますが、歴代誌は捕囚からの帰還にまで触れています。列王記の編者は過去のさばきの理由を説明することに重きを置き、歴代誌の編者は帰還後の民の歩みに思いを向けているからです。

　また歴代誌では、原因と結果が直接結び付けられることが少なくありません。「神を求めるなら祝福を受け、神を求めないなら祝福を失う」といった、幾分単純化された図式を示すことで、帰還の民がすぐにでも神を求めて生きるよう、励まそうとしたのでしょう。

　では実際、歴代誌の編者はどのように歴史を振り返ったのでしょうか。当時の聴衆は、そこからどのような励ましを受けたのでしょう。そして、それを読む現代に生きる私たちは、何を学ぶことができるでしょうか。歴代誌の言葉に耳を傾けていきましょう。

歴代誌 第一

1課　系図　1-9章

歴代誌は、大変長い系図で始まります。この系図は当時のイスラエルの民にとって、重要な意味があったのです。

1 歴代誌の編者は、編集時期よりはるか昔、創世紀の時代の系図（1:1-4と1:24-28）にまで遡（さかのぼ）ってイスラエルのルーツを示します。このことは、当時のイスラエル人の自己理解にどのような影響を与えたと思いますか。

2 イスラエル人には、「エノク」、「ノア」、「アブラハム」のような信仰の先輩がいました。彼らはどのような歩みをしたでしょう（ヘブ11:5-12参照）。

3 神は、アブラハムとその子孫であるイスラエル民族に、どのような約束を与えましたか（創12:1-3、7参照）。p.25コラム「アブラハムへの約束と神の恵み〔慈しみ〕」参照。

4 アブラハムの孫ヤコブ（別名イスラエル）には息子が十二人いて（2:1-2）、その子孫がイスラエル民族を形作っていきました[a]。2章から8章には、次のようにその子孫のリストがあります。ユダ（2:3-4:23）、シメオン（4:24-43）、ルベン（5:1-10）、ガド（5:11-17）、レビ（6:1-81〔5:27-6:66〕）、イッサカル（7:1-5）、ナフタリ（7:13）、マナセ（7:14-19）、エフライム（7:20-29）、アシェル（7:30-40）、ベニヤミン（8:1-28）です。

注）ヨセフの子、マナセとエフライムは、ヤコブの子とされたため（創48:1-6）、ヨセフの代わりに二人の名前が入っています。また、ダンとゼブルンの記事はありません。

a 12人が実際に生まれた順は以下のとおり：ルベン、シメオン、レビ、ユダ（レアの子）、ダン、ナフタリ（ラケルの女奴隷ビルハの子）、ガド、アシェル（レアの女奴隷ジルパの子）、イッサカル、ゼブルン（レアの子）、ヨセフ、ベニヤミン（ラケルの子）。創29:32-30:24、35:18。

初めに生まれたルベンではなく、ユダが筆頭に記されていること、レビ部族の中の一氏族であるアロン一族について記載が詳しいのはなぜだと思いますか（5:1-2、6:48-49〔33-34〕参照）。

5 9:2-34には、バビロン捕囚から戻ってきた民のことが記されています。彼らは、主にどこの部族の人たちでしたか（9:2-3）。

まとめ

神はアブラハムに対し、「子孫は大いなる国民となり、約束の地に住み、世界のすべての部族を祝福することになる」と約束しました。後に、ユダ族の中から王が出て、諸国の民がその王に従うようになるとも約束しました（創49:8-10）。また、レビ族には、神殿礼拝を支え、民の心を神に向ける祭司の務めが与えられていました。

考えよう

1 歴代誌の聴衆は異教徒に支配され、神の民であるとの自覚も揺ぎ、神殿での礼拝さえもおろそかになっていました。その現状は、旧約聖書に語られてきた歴史や約束とあまりにもかけ離れていました。彼らは自分たちの系図を見ることによって、何を思い起こしたでしょう。

2 現代のキリスト者は、信仰によってアブラハムの子孫となりました（ロマ4:13-17）。私たちは世界を祝福する者、世界を導く王国、とりなす祭司なのです（Iペテ2:9-10）。私たちは自らをどのような者と考え、また生きているでしょうか。

祈り

神よ、現状がどれほど困難でも、神の民である私たちをとおして世界を祝福する、というあなたの約束を信じ続け、行動するものとしてください。

2課　サウル王の背信　10章

9章の最後の部分（9:35-44）では、ベニヤミン族の系図（8:29-40）が再び取り上げられて、続く10章ではベニヤミン族出身で、初代のイスラエル王であるサウルの末路（まつろ）が語られています。

サムエル記第一では、サウルに多くの章が割かれています（サウルの油注ぎ[1]と即位[2]に始まり、華々しい勝利[3]、二度の大きな過ち[4]、そしてダビデとの関わりに至るまで。9-31章）。歴代誌ではそれが一切省かれて、サウルの最後の戦いに話を進めています。つまり、歴代誌第一10章は、11章以降の展開のために書き留められたと考えることができます。それでは、10章には何が記されているのでしょう。

1 ペリシテ人とイスラエルの最後の決戦の場はどこですか（10:1）。パレスチナ南部の沿岸地域に住んでいたペリシテ人が、イスラエルにとって防御と戦略上の要所であった北の山岳地帯にあるギルボア山（地図〔3-D3〕）にまで迫ってきたことは、イスラエルの目にどのように映ったでしょうか。

p.8コラム「ペリシテ人」参照。

2 サウルはどのように殺されましたか。他には誰が殺されましたか（10:2-6）。

3 サウルの死後も、その子イシュ・ボシェテ（別名エシュバアル）は生き残っていて[5]、サウル家とダビデ家の間の戦いは長く続きました[6]。ここでサウルの家系がすぐに途絶えたかのように歴代誌の編者が記しているのはなぜだと思いますか。p.2の「歴代誌の特徴」を参考に考えてみましょう。

4 サウルとその息子たちが死んだのを目撃したイスラエル人〔兵士〕は何をしましたか（10:7）。

5 ペリシテ人はサウロに対し何をしましたか。ヤベシュ・ギルアデ〔ギルアドのヤベシュ〕[a]の人々はどうしたでしょう（10:8-12）。ダゴン[b]

6 サウルが死んだのはなぜですか（10:13-14）。

7 サウルの死後、主が王として立てたのは誰ですか（10:14）。

まとめ

本来、ペリシテの地はイスラエルの領地となるはずであり[7]、サウルは、ペリシテの地を取り戻すべきでした。しかし、不信の罪のゆえに、今あるイスラエルの領地さえも奪われてしまい、サウル自身も非業の死を遂（と）げました。

考えよう

サウルの不信の罪は、民全体に影響を与えました。

あなたは、これまで指導者の責任と影響についてどのようなことを体験してきましたか。また、私たち自身には、どのような歩みが求められるでしょう。

---

a **ヤベシュ・ギルアデ：**ギルアデの北西部にある町だが、確定されていない。アンモン人の王ナハシュに包囲されたときにサウルがこの町を救出し、その事件がきっかけとなってサウルが王位に就いたという経緯（けいい）がある（Ⅰサム11章）。

b **ダゴン：**カナン人が礼拝していたが、ペリシテ人がカナンに移住すると、ペリシテ人の主神となった。詳細は不明。

祈り

神よ、家庭や教会、また、企業や政治の指導者が正しい判断をすることができるよう導いてください。また、私たち自身が絶えずあなたを信頼し、あなたのことばを守ることができるよう、どうぞお支えください。

コラム

「ペリシテ人」(10:1)

元々エーゲ海沿岸に住んでいたペリシテ人は、前13世紀の末から前12世紀の初めにかけてパレスチナの南海岸（地図6-F1〔4 -G1〕）に移住してきました。ペリシテ人の都市の中でも、アシュドデ、アシュケロン、エクロン、ガザ、ガテは、五都市連合を組んでいました。

ペリシテ人は、前11世紀には強大になり、イスラエルと全面的に衝突するようになります。青銅に比べてはるかに硬い鉄の生産技術を持つペリシテ人を前に、イスラエルは劣勢を強いられます（Iサム13:19-22）。イスラエルが王を求めるようになったのは、このペリシテ人の脅威のためでした。ダビデがペリシテ人を支配するようになってからは、イスラエルも鉄をふんだんに使うようになります。

3課　ダビデ、王となる　11章

サウルの不信の罪のゆえに、サウル家は滅び、イスラエルもペリシテ人の支配を受けるようになりました。そのため、主は「王位をエッサイの子ダビデに回され〔渡され〕」ました（10:14）。

1 ダビデはどのように全イスラエルの王となりましたか（11:1-3）。

注）ダビデはサウルの死後、ツィクラグからヘブロン（地図6-F3〔4-G3〕）に移り、そこでユダの家の王となり[8]、7年半治めました（I歴3:4）。残りの民はその間、サウルの子イシュ・ボシェテに仕えていました[9]。10:14と11:1の間には、7年半の隔たりがあったのですが、歴代誌の編者は、その部分を省略しています。

2 イスラエルの長老は、なぜダビデを王としたのでしょう。11:1-3で、「主」という言葉が三度用いられていることに注目しましょう。

3 歴代誌の聴衆は、ダビデが全イスラエルの王となったこの記事（11:1-3）をどのように受け止めたと思いますか。p.11コラム「牧者とメシア」を読んで考えましょう。

4 王となったダビデと全イスラエルは、何をしましたか（11:4-6）。それはどのような意味があったのでしょう。

注）イスラエルの民がカナンの地に入ったとき、神は諸民族を追い払い[10]、また、この地に住んでいたエブス人を聖絶するように命じていました[11]。しかし、イスラエルは、カナンの地の諸民族に勝利は収めましたが[12]、完全に追い払うことができずにいました[13]。

5 ダビデは次に何をしましたか（11:7-8）。歴代誌の聴衆は、かつてバビロニア軍の攻撃で廃墟となったままのエルサレムを目前にしているか[14]、再建途中の困難の中にいます[15]。彼らは、ダビデの町、すなわちエルサレムが初めに建て上げられていった様子をどのような思いで読んだと思いますか。

6 ダビデには、万軍の主がともにいてくださいました（11:9）。その彼のもとには、どのような人たちが集められましたか（11:10-25）。また、主は彼らを通して何を成し遂げましたか（11:14）。10:7の出来事と比べましょう。

7 ダビデのもとには、ユダの出身者だけでなく（11:26-30）、北の集落の出身者（11:31-37）、そしてイスラエルの出身でない者など（11:38-42）、多様な人が集まっていました。歴代誌の聴衆の目に、ダビデにあって一致するイスラエルの姿は、どのように映ったと思いますか。

注）ダビデの孫の時代に、王国は分裂することになります。

まとめ

ダビデの時代、イスラエルは一つとなって、神に従い、エブス人やペリシテ人と戦い、エルサレムを築き上げていきました。歴代誌の聴衆にとって、ダビデとその時代は、王と民の本来の姿、自分たちの待ち望んでいるかたちを示していたことでしょう。

考えよう

歴代誌の聴衆が待ち望んでいた約束の王が、ついにエルサレムに来ました。イエスこそ、ダビデの子孫、油注がれた王、メシアでした。そのことを信じる新しい神の民、キリスト者にとって、ダビデの時代の王と民の姿から学べることは何でしょうか。

祈り

神よ、イエスをメシアと信じる私たちが、考え方や文化の違い、人種の違いも乗り越えて一つとなり、王の王であるイエスの教えに従っていくことができるように助けください。

コラム

「牧者とメシア」（11：2）

ダビデは、イスラエルを牧する君主〔指導者〕となりました（11:2）。国民を守る一国の王は、羊を守り養う羊飼いにたとえられていたのです。この後の時代、イスラエルには、群れを散らし、群れを顧みない多くの牧者（王）が現れ、その罪のゆえに、ついに捕囚に至りました。

しかし、神は、将来ダビデのような良い牧者をもう一度イスラエルに立てる、と預言者をとおして約束していました（エレ23:1-4、エゼ34:1-16）。捕囚後の苦しみを味わっている歴代誌の聴衆は、自分たちの堕落の歴史と救いの約束について、聖書を教えたエズラなどの指導者たちから聞いていたことでしょう。